

シンポジウム「放射線看護学の確立に向けた学際的なコラボレーションのすすめ方」

Symposium “Interdisciplinary collaboration towards the establishment of Radiological Nursing”

別所 遊子

Yuko BESSHO

東京医療保健大学

Tokyo Healthcare University

本学会は、設立以来の立ち上げ期を過ぎて5年目に入り、放射線看護学とは何かを学会活動の成果で社会に浸透させていく時期に差しかかっている。

初日の草間朋子学術集会長長の講演で、放射線看護学は、公衆・医療・職業被ばくを受ける（可能性のある）すべての人々の安心と安全を確保するために必要な看護実践のエビデンスを「つくり」「つたえる」こと、そのために多くの学協会との連携・協働の重要性が挙げられた。これを受けて、日本放射線技術学会、日本保健物理学会との共催で本シンポジウムが企画され、それぞれの学会から白石順二氏、横山須美氏、および岩波由美子氏（がん放射線療法看護認定看護師）、加藤知子氏（東京医療保健大学）、小西恵美子氏（初代学会理事長）の5人のシンポジストから、放射線看護学の研究課題、研究手法、連携の仕方などについて意見、提案、助言がなされた。白石氏は放射線診療の場における看護職の協働者の立場から、放射線看護学におけるエビデンスの構築には防護具の効果など放射線計測による研究を協働して行うことが重要であると提案された。横山氏は、放射線防護に関わる保健物理学会の活動を紹介し、患者や地域で生活する人々の身近にいて健康を守る看護職には、放射線のリスクコミュニケーション、地域に根差した放射線防護のための教育・研究、他学会との情報共有を期待すると発言された。がんの放射線治療に専門的に関わる岩波氏は、看護師の配置などの理由で困難もあるが、看護の視点を強化するために、ほかの部門や施設、あるいは他職種とも連携して放射線治療看護の研究を進めたいと述べられた。加藤氏は独自の調査結果から、放射線診療や災害時の活動において医師、診療放射線技師が看護師に期待する行動、課題などを報告された。小西氏は、本学会のこれまでの成果を踏まえて、今後は放射線看護の教育コース、他学会・団体との協働、放射線看護学における看護とは何かを追求することが重要であると述べられた。

参加者も交えた討論の中では、連携を促進するために、今後学会間で学術集会の参加費を軽減するなど、相互交流を促す具体的な方法も提案された。シンポジウムを通して、実践のパートナーである専門職の研究活動や、関連が深い普段は馴染みが少ないほかの学会の活動や、本学会への期待を知ることができ、今後の本学会の活動を考えるうえで大きな刺激と契機を得ることができたと思う。